

# 講義ノート：『大日経』「世間成就品」 「悉地出現品」における四支念誦

阿部宏貴（貴子）

はじめに

筆者は現在、大正大学大学院の講義で『大日経』「世間成就品」「悉地出現品」を読んでいる。概して『大日経』は「住心品一」で心の段階、「具縁品二」で曼荼羅に入ること、「息障品三」で障害の滅除、「普通真言蔵品四」で諸真言を説いた後に、「世間成就品五」と「悉地成就品六」「成就悉地品七」（チベット訳は両方が第六章）で悉地成就の方法と結果を説く。このうち「住心品」と「具縁品」については多くの研究があり、学生もこれらを学ぶ機会が多いが、以降の章を熟考することはほとんど無い。しかし、本稿で取り挙げる両章は、『大日経』の観法を説く重要な部分である。そこで、本稿では講義ノートの一端をまとめようと思う。

両章では、三ヶ月間の修行を説き、その最初に四支念誦を行うと説く。前章で列挙した諸真言と種字の観想という流れに位置するが、真言そのものよりもそれを構成する文字と音声と本尊の観想を説く。これは『撰大軌』にも五字巖身観の先行として位置づけられ（現行の胎蔵界念誦次第では住定観に相応するだろうか<sup>(1)</sup>）、インド後期密教においては生起次第（自らに本尊を生起する次第）・究竟次第（性的ヨーガを中心とする次第）のうち、生起次第として展開するものである。

では「世間成就品」「悉地出現品」は四支念誦をどのように説いているのか。松長有慶（1952, 11）は、『大日経疏』に基づいて「世間成就品」の四支を、字・声・句（本尊の智身）・命息（月輪中に字声句を観じて出入息を調える）と見なす。一方、ブツダグフヤの『大日経広釈』には「世間成就品」の注釈は無いが、『上禪定品』<sup>(2)</sup>\**Dhyānottarapaṭalakrama*

のブツダグフヤ注『上禅定品広釈』(\**Dhyānottarapaṭalatīka*) に対応箇所があり、声・句（如来の身体）・句（自らの本尊の身体）・心（月輪）という四支を設けるといふ。また、酒井眞典（[1962]1973, 23-27）は、「悉地出現品」でも四支を説くと述べ、そのうえで『上禅定品』の声・句・心を『上禅定品広釈』で声・句・句・心の四支と解釈するのは、『大日経』の両章の影響を受けたものと指摘する。しかし、この区分には問題がある。「悉地出現品」所説の修行内容を踏まえたとはいへ、四支を改めて区分すべきであろう。

なお松長有慶（1952, 17）は、「世間成就品」所説の四支は、「説本尊三昧品」所説の字・印・形（種三尊）およびそれぞれに二種を設けた、菩提心・声、無色（手印）・有色（持物などの象徴物）、清浄（無相）・不浄（有相）の六種本尊へと展開するとし<sup>(3)</sup>、さらにそれが『上禅定品広釈』所説の菩提心、声、字、印、色、有相の六種<sup>(4)</sup>に結びつくと指摘する<sup>(5)</sup>。酒井眞典（[1962]1973, 28-29）も組み合わせは異なるものの、同様に『大日経』の四支と『上禅定品広釈』の六種を対応させている<sup>(6)</sup>。

しかしながら、「世間成就品」「悉地出現品」の経文が種三尊や六種本尊を明示しているわけではない。また「説本尊三昧品」はチベット訳で「悉地出現品」「成就悉地品」に続く第七章ではあるが、漢訳では第二十八章というかなり後方に位置する。漢訳はチベット訳で整理される前の成立といわれるため、「世間成就品」で示す四支と後章の六種との対応関係を拙速に探る必要はないように思われる。

そのため本稿では、まず「世間成就品」の経文を確認し、『大日経疏』『大日経義釈』の理解を示す。続いて「悉地出現品」を確認し、『大日経疏』『大日経義釈』『大日経広釈』の解釈を示し、それらに説かれる四支の区分とその修行内容を整理したい。そのうえで、六種本尊へ展開する要素が当箇所に見られるかを考察してみたい。なお両章の構成は以下の通りである。（※下線部は本稿で考察する箇所）

「世間成就品」 འཇིག་རྟེན་པའི་དངོས་གྲུབ་བསྐྱབ་པའི་རིམ་པར་ཕྱེ་བ་ 大正蔵 / Tib.D.

(世間の悉地成就に関する章, \*laukikasiddhisādhana-pāṭala?)

1. 三月念誦

- |                      |               |
|----------------------|---------------|
| 1) <u>一月目</u> ：四支念誦  | 17b18 / 180a6 |
| 2) 二月目：供物供養          | 17b29 / 180b3 |
| 3) 三月目：真言念誦の場所と曼荼羅描写 | 17c7 / 180b4  |

「悉地出現品」 དངོས་གྲུབ་བསྐྱབ་པའི་དེ་ཙམ་ནི་ད་རིམ་པར་ཕྱེ་བ་རྒྱལ་བ་

(悉地成就の真実に関する大章, \*siddhisādhana-tattva-pāṭalavistara?)

- |                               |               |
|-------------------------------|---------------|
| 1. 三世無量門決定智円満法句の説示            | 17c22 / 181a2 |
| 2. 金剛手による請問                   | 18a3 / 181a6  |
| 3. 成就に相應しい者                   | 18a11 / 181b3 |
| 4. 明呪・真言の威力                   | 18a24 / 182a2 |
| 5. 三月念誦                       |               |
| 1) <u>一月目</u> ：四支念誦           | 18b13 / 182b3 |
| 2) 二月目：三力偈                    | 18c14 / 183a5 |
| 3) 三月目                        |               |
| (1) 真言念誦の場所と曼荼羅描写             | 19a11 / 183b5 |
| (2) 阿字門                       | 19b29 / 184b5 |
| (3) 四魔降伏の真言の出生                | 19c21 / 185b1 |
| (4) 五字の布置観～a, va, ra, ha, kha | 20a20 / 186a3 |
| (5) 五字の布置観の成就                 | 21a23 / 187b6 |
| (6) 意生悉地の句                    | 21c2 / 188b1  |

1. 「世間成就品」

(1) 経文～漢訳・チベット訳

まず「世間成就品」の経文から見ていこう。(※以下番号筆者)

爾の時に世尊、復た執金剛秘密主に偈を告げて説いて言わく、真言教法の如くすれば彼の果を成就す。当に①字と②字は相応すべし。③句と句とも亦た是くの如し。心想をやし念誦して、善く一洛叉に住せよ。①初めの字は菩提心なり。②第二をば名づけて声と為す。句を想うて本尊と為す。而も自処に於いて作すべし。③第三(乙本の句は当に知るべし、即ち諸仏の勝句なり。行者彼の極円浄の月輪に住すと観ずべし。中に於いて諦誠らかに諸字を想うて次第の如くす。中に字句等を置いて想うて其の命を浄む。命とは所謂風なり。念は出入息に随うべし。(大正蔵17b18-28)

|དྲེ་ནས་ཡང་བཙམ་ཐུན་འདས་ཀྱིས་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་ཕྱག་ན་རྫོང་ཇི་བཀའ་རྩལ་པ། གསང་  
 བ་པའི་བདག་སོ་གསང་ཐུགས་ཅི་ལྷར་རླབ་པ་དང་། བརླབས་པའི་འབྲས་བུ་གང་ཡིན་པ་འདི་ཉོན་  
 ཅིག། ① ཡི་གེ་དང་ནི་ ② ཡི་གེར་བྱུང། |དྲེ་བཞིན་ ③ (1)གཞི་ལས་(2)གཞིར་བྱུར་པ། |ཤིན་ཏུ་  
 བཟམས་པས་ཡིད་ལ་ནི། |བཟམས་བརྗོད་འབྲས་ཐུག་གཅིག་བྱའོ། ① ཡི་གེ་བྱང་ཆུབ་སེམས་ཡིན་ཏེ། |  
 ② གཉིས་པ་སྐྱ་ཞེས་བྱ་བ་ཡིན། | ③ (1)གཞི་ནི་རང་གི་ལྷ་བཞུགས་པ། རང་གི་ལྷས་ཀྱི་གནས་ལ་  
 བྱ། | (2)གཞི་གཉིས་པ་ནི་རྫོགས་སངས་རྒྱས། |རང་གཉིས་མཚན་ཏུ་ཤེས་པར་བྱ། |རྐྱེད་པའི་དཀྱིལ་  
 འཁོར་རྣམ་དག་པ། |ཐུགས་པས་དེ་ལ་གནས་པར་བསམ། |ཡི་གེ་རྣམས་ནི་གོ་རིམས་བཞིན། |དེ་ཡི་  
 དབྱས་ཏུ་ལེགས་པར་དགོད། |སྐར་ལྷུང་(<sup>2</sup>བ་ཡི<sup>2</sup>)་རྫོགས་གིས་ནོན། |ཤོག་དང་རྩོལ་བ་རྣམས་པར་  
བྱུངས། |ཤོག་ཅེས་བྱ་བ་རླུང་ཏུ་བཤད། |རྩོལ་བ་དན་པ་ཞེས་བྱ་སྟེ། |དེ་གཉིས་བཟམས་པ་བྱས་ནས་  
 ལ། |ཤོན་ཏུ་བསྟེན་པ་ལེགས་པར་བྱ། (D. 180a6-b3; P. 144b4-7)<sup>(7)</sup>

(そしてまた、世尊は金剛手菩薩に説示された。「秘密主よ、真言をどのように成就し、成就した果は何かを聞きなさい。①字(\*a-kṣara, 不変なるもの)と②字(\*akṣara)は相応し、同様に③(1)句(\*pada)から(2)句へと転じる。制御した意で十万遍念誦すべきである。①〔第一の〕字は菩提心であり、②第二は声といわれる。③(1)〔第一の〕句は、自らの本尊(\*svadevatā)を立てて、自らの身体の依り所(\*āśraya)とすることである。(2)第二の句は等覚者・両足尊(\*dvipadaottama)と知るべきである。清浄なる月輪、真言行者はそれを定めると思惟すべきである。諸々の字を順序通りにその中央に置き、再び集めた文字によって抑制して、命息(\*prāṇa)

と行動 (\*vyāyāma) を浄めなさい。命息とは風 (\*vāyu) を指し、行動とは念 (\*smṛti) といわれる。その両者を制御することによって、先行 (\*pūrvasevā) を為すべきである。)

漢訳は番号の通り、①字=菩提心、②字=声、③句という三支を設ける。一方チベット訳では、二つの字に加えて、③(1)第一の句=本尊、(2)第二の句=正等覚者および月輪のことである。句 (pada) はこの文脈において一般に「根基」と訳されるが、語句、足、基盤、境地等の多義を考慮し、漢訳と同じく「句」と訳しておく。おそらく身体的な意味をもつものである。

ちなみに、成立が早いとされる『上禪定品』には、以下のようなパラレルがあり、特に網掛け部分が近似している。

|② ལྷ་དང་① སེམས་དང་③ གཞི་ལ་གཞིལ། | ② གསང་ལྷགས་① མི་འགྱུར་③ གཞི་ལ་  
གནས། | ཡན་ལག་མ་ཉམས་གསང་ལྷགས་བཟླས། | ངལ་ན་བདག་ལ་ངལ་སོ་ཤིག་ | ① མི་འགྱུར་བ་ནི་  
② ཡི་གེར་ལྷན། | ③ (1) གཞི་ལས་(2) གཞིར་འགྱུར་དེ་བཞིན་ཏེ། | རང་ལྷགས་ཕྱིར་ནི་གང་  
བཏགས་པ། | ཡིད་ཀྱི་དག་པ་བསམ་པར་བྱ། | ལྷན་ལྷད་པ་ཡིས་བཀྲག་ནས་ནི། | ལྷོག་དང་ཚོལ་བ་  
བཟླས་པའི་ཡིད། | གསང་ལྷགས་རིག་པས་ལྷགས་ལ་སྦྱར། | ཡིད་ཀྱི་བཟླས་བརྗོད་བཅུས་པར་བྱ།  
(D. 224a3-4; P. 228b4-6)

(②声と①心と③句に専念し、[それぞれ] ②真言と①不変なるものと③句と定め、[それら] 支分を失せず真言を誦し、疲労すれば自ら休息しなさい。①不変なるものは②字と相応し、同様に③(1)句から(2)句へと転ずる。それぞれの真言として観察するものを、清浄なる意で思惟すべきである。再び集めた[真言]を引入し、命息と行動を抑制した意を[具えて]、真言を知る者は真言を修習して、意の念誦を始めるべきである。)

このように『上禪定品』は、①心=不変なるもの(菩提心)、②声=真言=字、③句とする。これを『上禪定品広釈』では、③句に(1)(2)の区別を設け四支と解釈する。

## (2) 『大日経疏』『大日経義釈』

そこで漢訳の注釈書を見てみよう。松長有慶（1952, 13-14）は、『大日経疏』では上記経文中の「中に字句等を置いて」以降を第四と捉えて、字・声・句・命息（月輪）の四支を設けるとする。しかし、そのようには捉えられない。

まず①第一の字については、両注釈とも不変なる菩提心と捉えている。その修習としては、概して心を白浄にすることとある。

②第二の字については、以下の通りである。

「第二をば名づけて声と為す。句を想うて本尊と為す。而も自処に於いて作すべし」とは、又当に字々句々、真言の「声」を観想すべし。前の如く次第に相続し輪環して断ぜず。…而も其の身に入り、其の体内に遍ぜしむ。此の因縁をもって、よく身心をして垢濁を掃除せしむること、火の起きる時に諸塵は悉く浄なるが如し。亦常に心一境にして善く住して乱れざるべし。

…又、「句」の中の義とは即ち是れ本尊の証なり。先ず本尊を想うこと明了なり。次に即ち自ら己身は本尊に同なりと観じて内外をして明了ならしむ。（大正蔵688b26-c5）

このように、第二の字は声の意味であり、それが行者の体内に行き渡ることを観察する。それにより身心を浄化し、心一境に住すとあり、『瑜伽師地論』に見られる止（*samatha*）と近い内容を示している。

注目すべきは「句」以下の説明である。ここでは自らの本尊を観て、自らの身体との合一を観想するように説く。これは②声の説明ではなく、③句を解説しているように思われる。

次の③句については、以下の通りである。

「第三の句は当に知るべし。即ち諸仏の勝句なり…」とは、次に当に「仏」を観ずべし。…色に即ち白黄赤等有るが如く坐起の身印の形も作さんと欲う所の事に随って極めて之れを観ぜよ。…又「月輪」円明清浄なるを想って、字輪を観じて、此の輪を明浄の心の中に在け。前の如く成就す。此れ即ち浄菩提心の義なり。…「中に字句」

等を置いて想うて其の命を浄む」は、即ち是れ如上に、先ず字を觀じ、声を觀じ、本尊を觀ずるなり。然して後に仏を觀ぜよ。…又謂う所の「出入息」とは…本尊の心より念々に其の心に流入すること、猶お入息の如し。復た自許の身心の中より、念々に流出して、本尊の心に入りて、念々の心、無間なること、猶し出息の如し。(大正藏688c16-689b3)

ここでは「句」として毘盧遮那仏の色形を觀ずることを示す。また「月輪」以降は月輪および字輪の円明たるを觀察し、自らの心に置く。そして本尊—ここでは毘盧遮那仏—を觀想して、本尊から自身へ、自身から本尊へと呼吸が出入することを觀て、自らに本尊を確立させる。以上から『大日經疏』においても、①字=菩提心、②字=声、③(1)句=本尊を自らの身体として觀察する、③(2)句=毘盧遮那仏を觀察し、月輪觀と出入息により自らと合一させることを説くといえる。

また『大日經義積』では、

經に云う。「句を想うて本尊と為す。而も本処に於いて作すべし」とは、句は是れ住処の義なり。…次に即ち此の尊の身を觀じて、内外の想を為さず、爾の時本尊の身即ちこれ自身なることを見る。此は是れ、第二の転なり。

…当に知るべし「第二の句は即ち諸仏の勝句なり」と云うなり。猶し此の勝句に入るが故に、普門の曼荼羅の種種の身土に於いて見んと欲する処の者に随つて、即ち意に随つて転成す。(続天台宗全書 pp. 358-359)

と、『大日經疏』で「第三の句」とある箇所が「第二の句」であり<sup>(8)</sup>、第一の句を本尊と自らの身体の合一、第二の句を自らを曼荼羅の諸仏の身土と解釈する。そしてこの後の段落では、自らの浄月輪中に本尊を置いて入出息を行うとする。以上から、漢訳ベースの注釈書においても、心・声・句・句の四支と理解しており、月輪觀は①菩提心の段階ではなく、むしろ③(2)句において修習すべきものであることが分かる。

## 2. 「悉地出現品」

### (1) 漢訳・チベット訳

次に「悉地出現品」を見てみよう。以下の番号のように区分すると「世間成就品」の四支とのトレースが可能となる。

〔②声〕爾の時に世尊、復た、三世無礙力の依たる、如来加持不思議力の依たる、莊嚴清浄蔵三昧に住したもう。即時に世尊、三摩鉢底の中より無尽界の無尽の語表を出したもう。法界力と無等力と正等覚の信解とに依って、一音声を以って四処に流出したまえり。普ねく一切法界に遍じて、虚空と等しき無所不至の真言に曰わく「南麼 薩婆佉他引藥帝嚩毘戾反一 微濕嚩二合目契弊毘也反二 薩婆他三阿阿引闍嚩四」

正等覚の心、是れより普ねく遍じたもう。即時に一切法界の諸の声門あって、正等覚の幟幟の音に従って互いに声を出す…。是の故に勤めて精進して、諸仏の語心に於いて、常に無間の修を作し、心を浄めて我を離るべし。

〔①菩提心〕爾の時に薄伽梵、復た此の法句を説きたもう。正等覚の心に於いて成就を作さんには、園苑と僧坊とに於いてせよ。若しくは巖窟の中に在って、或いは意に楽う処にして、彼の菩提心を觀ぜよ。

〔③句(1)〕随って彼の一心を取って、心を以って心に置け。極淨の句を証し、無垢にして安んずること不動、分別せざること鏡の如く、現前すること甚だ微細なり。若し彼れ常に觀察し、修習して相応すれば、乃至本尊と自身の像と皆な現ず。

〔③句(2)〕第二の正覚の句は、鏡漫荼羅の大蓮華王座に於いて、深邃にして三昧に住す。総持の髮髻冠にして、圍繞するに無量の光あり。妄執分別を離れて、本寂なること虚空の如し。彼の中に於いて思惟して、撰意の念誦を作せ。(大正蔵18b13-c13)





等引に入るとすぐに、また無余の法界のいかなるものをも知らしめる諸々の声（\*śabda）から〔生じ〕、法界定住力と、無等等力と、正等覚者の信解から生じたものとして、**四处**が一音声（\*svara）より生じて、一切法界に遍じて虚空に等しきものとなって現れた。namah sarva-tathāgatebhyo viśvamukhebhyaḥ sarvathā a ā am ah（一切如来に帰依し奉る。あらゆる方面のために、あらゆる方法によって、ア・アー・アム・アハ）

その正等覚者の諸々のフリダヤ（a, ā, am, ah）が生ずるとすぐに、その一切法界の吼声の門から、正等覚者のフリダヤの言葉の相（\*ākāra）として、〔すべてを〕知らしめる音声の一つずつ表出させた。…それゆえ、いつでも仏の称賛するフリダヤについて、内の我性を浄めることによって、常に専念すべきである。

〔①菩提心〕そしてまた、正等覚者の諸々のフリダヤの成就を起こすならば、花園、僧坊、洞窟、または意が静寂になるところで、菩提心を修習し、兆相が生ずるまで坐すべきである。

〔③句(1)〕そして、それらのフリダヤから何か一つを取って、不確かさがなくなるまで、(1)句を成就すべきである。そして、フリダヤを胸に定めて意を成就するべきであり、清浄で無垢で不動で、分別の無い鏡のように、詳細を顕現し、**常に行ずる**瑜伽によって、自らの身体を自らの本尊の身体と見るまで行ずるべきである。

〔③句(2)〕**第二の句は、正等覚者がまさにその円鏡の内において、大蓮華王〔座〕に坐し、窟内に坐すが如くの禅定に入っている。**頂髻と冠と無量の光明で囲まれ、一切の分別や妄分別を離れ、虚空のように本来寂靜である。そこに声が生じていると思ひ、等引によって念誦すべきである。）

すなわち、②声とは、世尊が三昧によって出生させた世間のあらゆる音声のことであり、これを行者が修習するときには、世尊は一音声より a, ā, am, ah を流出し、それが一切法界に遍満したと観察する。チベット

訳もほぼ同様である。「世間成就品」との相違は四字の流出を説く点である。①菩提心では、適した場所で菩提心を修習することを説く。③(1)第一の句の修習は、四字のうち一つを取り自らの胸に定め、自らの身体と本尊の身体を同等と見る。(2)第二の句については、漢訳でも「第二の正覚の句」と明示しており、「世間成就品」の「第三の句」と同等の内容を指している。そのため、同品の「第三」は正しくは「第二」であったと見て間違いないだろう。ここでは正等覚者つまり毘盧遮那仏の色形を取ったのちに、一切の分別を離れることを表している。なお「世間成就品」は無分別の境地を明示していない。

『上禪定品』では(1)句から(2)句に転ずるとし、『上禪定品広釈』では、(1)如来の身体を(2)自らの本尊の身体に転ずると解釈しているが<sup>10)</sup>、『大日経』では(1)自らの身体に本尊の身体を見ることから、(2)毘盧遮那仏の色形を觀察し無分別となることを説いており、無分別の獲得という思想をより明確化したといえる。

## (2) 『大日経疏』『大日経義釈』

次に、漢訳の注釈書から特徴的な解釈を抜粋して考察してみよう。

### ②声

経文の「一音声を以って四処に流出」について、『大日経疏』『大日経義釈』とも一音声から a, ā, am, ah が生じて世界に遍満するという。『大日経疏』の当該箇所では、「四処」は四字と、四徳（常・楽・我・淨）、四色（青・黄・赤・黒）、四願（布施・愛語・利行・同事）を指すという。ここではいわゆる発心・修行・菩提・涅槃・方便の五転に言及していないが、「字輪品」では五転を説き<sup>11)</sup>、『菩提心論』に引用されている。

一方『大日経義釈』の当該箇所では、『法華経』を引用して四字を仏知見の開・示・悟・入に当て、第五として ah を挙げて正等覚心とする<sup>12)</sup>。

### ①菩提心

『大日経疏』では、「成就を為さん」がための出世間道の方法として四字の観察を説く。ここでは月輪を説かないが、『大日経義釈』は自心の八葉蓮華に阿字を觀じ円鏡（月輪）を現前させるとする。

次に『大日経疏』『大日経義釈』ともが、この念誦全体について『瑜伽師地論』に記される非三摩呬多地と三摩呬多地で説明する。

『大日経疏』一には謂く非三摩呬多地、二には亦是れ三摩呬多地なり。訳して等引と為す。…此れは皆是れ非三摩呬多地なり。謂く初めて世間成就を得る時、加する所の藥物等に、皆不思議の力用有り。…行者初めて出世間觀の方便を修する時、先ず本尊を觀ぜよ。画像に依りて善觀し已つて、初めの時は目を閉じて明了なることを得、其の後、漸く眼を開いて亦見るに、顯現明了にして隱味有ること無し、此れは是れ未等引なり。（大正藏695b12-21）

『大日経義釈』一には非三摩呬多地、二には三摩呬多地なり。其の等引の名相は当に『瑜伽師地論』に約して之を分別すべし。…非三摩呬多地とは、行者初めて心蓮華内の阿字を見る時の如き其の任運に安住す。…次に当に図画するところの三昧耶秘密の身に依りて善く本尊の威儀色像を取りて諦に之を觀ずべし。（続天台宗全書 p. 404）

すなわち『大日経疏』では、世間道における藥物等の成就是非三摩呬多地であり、出世間道では本尊を画像によって觀じて顯かに現前させるが、同様に未等引（非三摩呬多地）であると述べる。『大日経義釈』では、阿字を明瞭に現前させること、あるいは図画した本尊の色像を觀察することは非三摩呬多地であると見なす。

### ③句(1)

初めの句に関して、經文では「隨つて彼の一心を取つて…自身の像と皆な現ず」という。『大日経疏』では、行者はまず四字のうち一つをとり、次のように觀察するという。

先ず既に本尊の像を觀見し已って、本尊の心上に於いて此の明浮の鏡を觀ず。鏡中に此の字あり。一心に此の字を觀じるとき、即ち此の中に於て、本尊の眞実の相を見ることを得。亦自ら円中に於いて其の身を見る。此れは猶お是れ未等引の相なり。…後時には、心中の円明の上に本尊を見、本尊の円明の上に復自身を見る。是の如く互相に照見して障礙有ること無きを影像成就と名づく。此れは亦非等地なり。(大正蔵695c12-20)

まず本尊の心上に円鏡(月輪)を觀じ、そのなかに一字を觀察する。そして自身の円鏡のうちにも本尊の身体を見る。しかしこの心一境は未だ等引ではない。また自身の円鏡に本尊、本尊の円鏡に自身を見て、障礙が無くなる。これを影像の成就というが、まだ未等引の段階である。

『大日經義積』では、行者は初めて觀法を学ぶときには、声輪ないし声字を本尊の像と見なすと説く。そしてその本尊の上に円明の種子を觀じ、それが法界に遍滿する、反対に一微塵のうちにあると觀想する。次に行者は自身と本尊の合一を觀想し、本尊となった自身の影像が現前するという。これも影像の成就であり未等引であるという<sup>(13)</sup>。

なお『瑜伽師地論』「本地分」では、三摩呬多地を四靜慮、八解脫、三三摩地、四修定等の諸々の禪定とし、非三摩呬多地は初学者が散乱や睡眠を伴って行う禪定などと説く。ここでの説明はそれと異なるが、むしろ「声聞地」の有作意の瑜伽行者の觀察(vipaśyanā)に近い。そこでは、実物や図画を見ながら繰り返し対象を觀察した後、その影像(pratibimba)を觀察する。その後世間道による神通力の獲得を経て、出世間道による尽智および種姓清淨(gotrāparisuddhi)を獲得するプロセスを説いている。

### ③句(2)

次に「鏡漫荼羅の大蓮華王座に於いて、深邃にして三昧に住す」について『大日經疏』は、

第二の句は、仏が心鏡深窟の中に在し、乃至、自形が本尊と作るこ

とを観ずるなり。先ず本尊の心上に円明の浄鏡有り、鏡中に窟状有り、中に本尊有りと観ず、即ち是れ真に仏を見るなり…若し自心の上の円明を観ずれども、亦是れ如来本尊中に在す。是の如く展転相現して相い妨礙せず。本尊清浄にして諸の分別を離れたり。(大正蔵696a7-16)

と述べる。ここでは先に観じた本尊の心上に、毘盧遮那仏の色像を観察し、自らの心上にも仏を観察する。こうして自らと仏とが相即し、分別を離れるという。三摩呬多地に言及しないが、おそらくこれを指すのであろう。

『大日経義釈』では、ここから等引地に入ると明示し、毘盧遮那仏が加持身として耆闍崛山に在すことを観察するという。さらに、自らの身体を毘盧遮那仏の三昧耶身と見なす。そして一切の戲論を離れて無相成就をなし三摩呬多地を得るとい<sup>(14)</sup>。

以上、『大日経疏』『大日経義釈』を見てきたが、両者に大きな相違は見られず、むしろ次の点で近似する。②まず声として四字の遍満、①菩提心として阿字の現前を説き、両者ともにこれを非三摩呬多地とする。また③(1)句では、本尊の身体を自らの身体に定め、非三摩呬多地、影像成就に入る。③(2)句では、毘盧遮那仏の観察の後に、分別を離れ、三摩呬多地、無相成就を得ると説く。そしてここでも月輪の観察については、主に③句の段階におけるものである。

### (3) 『大日経広釈』

次にブツダグフヤの注釈を見てみると、以下の通りである。

#### ②声

まず毘盧遮那仏による「三世無着力の基体を加持し、如来の所依たる不思議の莊嚴清浄蔵」の三昧について、前半を勝義、後半を世俗の意味と解釈する。後半は、a字から如来の三十二相が出生する三昧と示す。そして前半については、

「**基体**」とは真如の自性であり、a字なる種字を加持し (\*adhiṣṭhāna)、生死の限り諸々のa字を認受する (\*adhivāsana) 依り所という意味であり、それが勝義の意味と説く<sup>(15)</sup>。

と示す。基体 ऀः (未再治本では ऀः, \*āśraya) とは、aなる種字を加持すなわち植えつけ、生死の限りそれらを認受する場であるという。つまり基体とは身体的な依り所を意味しており阿頼耶識を想起させる。唯識思想において阿頼耶識は、一切の種子を具す識 (sarvabījaka-ālayavijñāna) と称されており、そこからの発展的な解釈があるように見える。唯識の教理と密教の種子の関係を改めて考察する必要がある。

「**四処**」については「菩提 [心]・修行・普覚・涅槃などと順序通りに見るべきである」という<sup>(16)</sup>。「悉地出現品」の冒頭からa字の四種の意味を説いており、ブッダグフヤにとっては定着した解釈であったと思われる。

### ①菩提心

ここでは、適した場所で菩提心を修習すべきことを説くに過ぎず、『大日経疏』と同様、月輪観には言及していない。

### ③(1)句と(2)句

ここでは、まず四種a字のうち一つを取って自分の胸の月輪に置き、その月輪中にa字を定めて空性三摩地に入る。次いで、a字より光明を広大・収斂させる観想を行い、自らの本尊の色形へと転変させるという。またその転変の過程に三種があるとし、以下のように示す。

そのうち、一般に本尊の色形 (\*rūpa) に転変することにも三種がある。第一は、印と真言の瑜伽によってその本尊の色形は我であるただ信解する (\*adhimukti) ことである。第二は、「常に行ずる」力によって自らの本尊の色形として疑いなく明らかに顕現させることである。第三は、瑜伽の力で自らの身体を変じて本尊の身体に転ずることである。…そのように自らの身体を本尊の色形に転変させ

て、そのフリダヤである一つのaを思惟して、そのaから菩提心の印たる鏡に等しい月輪を思惟して、それをまた極めて清浄無垢であると思惟する。その中央に、a字より変じた毘盧遮那の身を思念する。それによって「**第二の句は、正等覚者が…禅定に入っている**」などといわれた<sup>(17)</sup>。

すなわち、まず印と真言によって自らを本尊の色形と確定（信解）する。第二にそれを明らかに顕現させる。第三に自らの身体を本尊の身体に転変させ、そこにa字を観察する。そのa字に菩提心の象徴としての月輪を見て、その月輪の中央にa字より転変した毘盧遮那仏の身体を観想する。つまり第二までが(1)句、第三が(2)句に相応する。

以上を整理すると、②声については、四字が一切の法界に遍満することを観察する。①次に、菩提心を適した場所で修習する。③(1)第一の句で、本尊の色形を顕現させる。(2)第二の句で、毘盧遮那仏の身体を観じ、自身との合一をはかるといふ。

まとめにかえて

以上、四支の区分とその修行内容を見てきた。そこで、次のことを指摘しておきたい。

1. 四支念誦とは、字・声・句・命息（月輪）といわれるが、字（菩提心）・声・句（本尊）・句（正等覚者）と理解すべきであろう。なお月輪観については、句の観察に結びついており独立したプロセスではない。
2. 「世間成就品」と「悉地出現品」の四支の相違は、後者のみが最終段階として無相無分別を説く。ここに世間道と出世間道の相違が見て取れる。
3. 『大日経疏』『大日経義釈』は、第一の句を非三摩呬多地と影像成就、第二の句を三摩呬多地と無相成就と解釈するが、『大日経広釈』に同様の解釈はない。
4. 『大日経』『世間成就品』『悉地成就品』成立時点では「説本尊三昧品」所説の種三尊および六種本尊は想定されていない。ただし、その要素は



四支念誦のうちに見られるため、暫定的に以下のように左から右へと展開したと仮定しておきたい。第二の句は、観想のプロセスとしては有相も含むが、便宜的に無相に区分しておく。また印を持物、手印と解釈するならば、両章に対応する文言は見られない。

上禅定品	世間成就品	悉地出現品	説本尊三昧品	説本尊三昧品	上禅定品広積
心	字：菩提心	字：菩提心	字(種)	菩提心	字
声	字：声	字：声による四处フリダヤの流出		声	声
—	—	—	印(三)	有色 (広積：持物等)	色
				無色 (広積：手印)	印
句	句：本尊	句：フリダヤを胸に定め、本尊を自らの身体に現す。 ・大疏・義積＝非三摩呬多地、影像成就。 ・広積＝本尊の色形を顕現させる。	形(尊)	不浄＝有相	有相の三摩地＝有分別智
	句：等覚者・月輪	句：月輪内に毘盧遮那仏の色形を観察し、一切の分別を離れる。 ・大疏・義積＝三摩呬多地、無相成就。 ・広積＝清浄無垢の月輪内に毘盧遮那仏を観察。自らの身体を仏の身体に転ずる。		清浄＝無相	不二の三摩地＝無分別智

さて「世間成就品」では四支念誦を第一月における先行とし、第二月

講義ノート：『大日経』「世間成就品」「悉地出現品」における四支念誦

に入って供物による供養、第三月に曼荼羅を描き兆相を得るという。「悉地出現品」では、第二月に三力偈を説いて利他行を強調し、第三月に釈尊の降魔成仏に擬えた大勤勇 (mahāvīra) の真言が明かされ、その五字を身体に布置するいわゆる五字嚴身觀を修して無分別の境地を得るといふ。本稿ではほんの一部の考察にとどまったが、全体を把握するために、この後も注意深く見ていきたいと思う。

#### 〈テキスト〉

『上禪定品』 D. 808, P. 430. \**Dhyānottaraṭālakrama*.

『上禪定品広釈』 D. 2670, P. 3495. \**Dhyānottaraṭālatīka*.

『大日経』 漢訳：大毘盧遮那成仏神変加持经 (大正蔵848)

チベット訳：D. 494, P. 126. \**Mahāvairocanaḥbhisambodhi-vikurvītādhiṣṭhāna-vaipulyasūtreṅdrarāja-nāma-dharmaparyāya*.

『大日経疏』 大毘盧遮那成仏経疏 (大正蔵1796)

『大日経義釈』 毘盧遮那成仏神変加持经義釈 (続天台宗全書 密教I)

『大日経広釈』 未再治本(Bh) D. 2663, P. 3487. \**Vairocanaḥbhisambodhi-vikurvītādhiṣṭhāna-mahātantra-bhāṣya*.

『大日経広釈』 再治本 D. 2663, P. 3490. \**Vairocanaḥbhisambodhi-vikurvītādhiṣṭhāna-mahātantra-vṛtti*.

#### 〈参考文献〉

北村太道 (2020) 『歳文和訳 大日経』 起心書房.

北村太道 (2020) 『全訳ブツダグヒヤ 大日経広釈』 起心書房.

クンチョック・シッター (1993) 「ツォンカバの『ガクリム・チェンモ』における『大日経』の本尊瑜伽について」『日本西藏学会会報』 39.

酒井眞典 ([1962]1973) 『修訂 大日経の成立に関する研究』 国書刊行会.

田村宗英 (2020) 「六種本尊について—*Vajravīdhāraṇa-dhāraṇī*の注釈を中心に探る—」『密教学研究』 52.

田村宗英 (2021) 「六種本尊と音声に住する禪定 [の念誦]」『智山学報』 84.

松長有慶 (1952) 「念誦の四支分と種三尊」『密教文化』 20.

松長有慶 (1972) 「大乘仏教の儀軌化」『密教文化』 98.

松長有慶 (1988) 「金剛界の微細会と供養会について」『密教文化』 162.

- 山本匠一郎 (2002) 『『大日経』所説の〈有相と無相〉について』『智山学报』65。  
 山本匠一郎 (2003) 『『大日経』所説の本尊瑜伽について』『密教学研究』35。  
 山本匠一郎 (2012) 『『大日経』の資料と研究史概観』『現代密教』23。

註

- (1) 『撰大軌』「彼世間念誦 有所縁相應 住種子字句 或心隨本尊」(大正蔵850, 85b15-16)
- (2) 以下、\*は想定されうる原語を示す。
- (3) 「説本尊三昧品」(D. 189b-190; P. 154a-b) の訳語を統一しておく。  
 三種：ཡི་གེ་ 字、ཕྱག་རྒྱ་ 印、གཟུགས་ 形 (\*akṣara, mudrā, rūpa)。  
 六種：བྱང་ཆུབ་ཀྱི་སེམས་པ་ 菩提心、སྒྲ་ 声、གཟུགས་དང་བཅས་པ་མ་ཡིན་པ་ 無色、གཟུགས་  
 དང་བཅས་པ་ 有色、ཡོངས་ལྷུ་དག་པ་ 清浄/མཚན་མ་དང་བྲལ་བ་ 無相、ཡོངས་ལྷུ་དག་པ་  
 不浄/མཚན་མ་དང་བཅས་པ་ 有相 (\*bodhicitta, śabda, arūpin, rūpin, pariśuddha/  
 nirmimitta, aparīśuddha/sanimitta)。山本匠一郎(2002)による *Pradīpodyota-  
 natīkā* 引用部分参照。
- (4) 『上禅定品広釈』では表現の異なる六種を説く。བྱང་ཆུབ་ཀྱི་སེམས་ཀྱི་མཚན་  
 ཉིད་གཉིས་ལུ་མེད་པའི་ཉིང་དེ་འཛིན་དང་། སྒྲ་དང་། ཡི་གེ་དང་། ཕྱག་རྒྱ་དང་། གཟུགས་དང་། ལུན་  
 རྩེབ་ཀྱི་ཉིང་དེ་འཛིན་རྣམས་པ་དང་བཅས་པ་ (菩提心の相である不二の三摩地、声、  
 字、印、色、有相の世俗の三摩地: D. 10a4; P. 12a1-2) : རྣམས་པར་རྟོག་པ་དང་  
 བཅས་པ་དང་། རྣམས་པར་མི་རྟོག་པའི་ཡི་གེས་དང་། སྒྲ་དང་། ཡི་གེ་དང་། ཕྱག་རྒྱ་དང་། གཟུགས་ (有  
 分別 [智]、無分別智、声、字、印、色: D. 13a2-3; P. 15b1)
- (5) 松長説の組み合わせを示すと次の通りである。

世間成就品	説本尊三昧品	説本尊三昧品	上禅定品広釈	上禅定品広釈
①字	字 (種)	菩提心	声	字
②声		声		声
月輪	印 (三)	無相 = 無色	心	真實 = 菩提心
諸文字の安立		有相 = 有色		相 = 有相
④兩足尊	形 (尊)	清浄 = 無相	如来の身	印
③自らの本尊		不浄 = 有相	自らの本尊の身	姿 = 色

- (6) 酒井説における『上禅定品広釈』の理解 (p.19; 28-29) は、以下の通り。(1)空 = 菩提心の相たる空性、(2)字 = 月輪に文字を建立すること、(3)声 = 真言の音声縁ずること、(4)色 = 外に如来の身を縁じ、自身本尊の身と転変すること、(5)印 = 菩提心の印となりたる月輪、(6)相 = 有相と無相の三摩地に住すること。このうち「世間成就品」とは、(3)声 = ②声、(4)色 = ③④句、(5)印 = ①菩提心 (字) と対応すると示す。松長説とは一致しない。

なお、田村宗英（2020; 2021）では *Vajravīdhāraṇa-dhāraṇī* の注釈類における六種本尊を論じている。

- (7) <sup>1)</sup>D. གཞག. <sup>2)</sup>P. བའི.
- (8) 続天台宗全書 (p. 359) では、対抗本口（文明七年十四卷写本）が「第三句」と読んでいることを記している。
- (9) <sup>1)</sup>P. om. <sup>2)</sup>P. དབྱེངས. <sup>3)</sup>D. སརྩ. <sup>4)</sup>D. མཚན་པ. <sup>5)</sup>P. དབྱེངས. <sup>6)</sup>P. ཅེག. <sup>7)</sup>P. བསྐྱེད.  
<sup>8)</sup>P. om. <sup>9)</sup>P. adds ཡང. <sup>10)</sup>D. ཅེག. <sup>11)</sup>P. ཀར. <sup>12)</sup>D. བསྐྱེད. <sup>13)</sup>D. གཞག.
- (10) 酒井眞典（[1962]1973, 289）参照。
- (11) 『大日経疏』大正蔵723b2-5.
- (12) 『大日経義釈』続天台宗全書 p. 402.
- (13) 『大日経義釈』続天台宗全書 pp. 405-407.
- (14) 『大日経義釈』続天台宗全書 pp. 407-408.
- (15) གཞི<sup>1)</sup>་ཞེས་པ་ནི་དེ་བཞིན་ཉིད་ཀྱི་རང་བཞིན་ཏེ། ཡི་གེ་ཨའི་<sup>2)</sup>འབྲུར་བྱིན་བྱིས་རྫོབ་པ<sup>2)</sup>་སྟེ། འཁོར་བའི<sup>3)</sup>་མཐའ་ཇི་<sup>4)</sup>སྲིད་ཀྱི་<sup>4)</sup>བར་དུ་ཡི་གེ་ཨ་རྣམས་སུ་སྟག་པར་གནས་ཞེས་པའི་དོན་ཏེ་དེ་ནི་དོན་དམ་པ<sup>5)</sup>་བསྟན་པའོ། (D. 12a5-6, P. 117b4-5, Bh D. 164a2-3, P. 205a4-5) <sup>1)</sup>Bh D, P. གནས. <sup>2)</sup>Bh D, P. འབྲུ་བྱིན་བྱིས་བསྐྱབས་པ. <sup>3)</sup>Bh D, P. བ་དེའི. <sup>4)</sup>Bh D, P. ཇི་ཅས་པའི་. <sup>5)</sup>Bh D, P. བར་.
- (16) བྱང་ཚུབ་དང་། རྫོད་པ་དང་། ལུན་དུ་སངས་རྒྱས་པ་དང་། ལྷ་དན་ལས་འདས་པ་རྣམས་<sup>1)</sup>སྤྲི་མ་བའི<sup>1)</sup>་བཞིན་དུ་<sup>2)</sup>བསྟན་པར་བྱའོ<sup>2)</sup>། (D. 13a3, P. 118b3-4, Bh D. 164b6, P. 206a5)  
<sup>1)</sup>D. ལུ་རེག་པ. Bh D, P. རིམ. <sup>2)</sup>Bh D, P. བསྟན་པོ་.
- (17) དེ་ལ་སྦྱིར་སྤྱིའི་གཟུགས་སུ་བསྐྱར<sup>1)</sup>་བ་ལ་ཡང་རྣམ་པ་གསུམ་སྟེ། གཅིག་ནི་ཕྱག་རྒྱ་དང་ཐུགས་རྒྱུར་བས་སྤུའི་གཟུགས་དེ་བདག<sup>2)</sup>་གོ་སྟོམ་པར་མོས་པ་ཅམ་མོ། །གཉིས་པ<sup>3)</sup>་ནི་རྟག་ཏུ་གོམས་པའི་དབང་གིས་རང་གི་<sup>4)</sup>སྤྱིའི་གཟུགས་སུ་ཐོ་ཚོམ་མེད་པར་གསལ་བར་སྤྱང་བའོ། །གསུམ་པ<sup>5)</sup>་ནི་རྫོགས་པའི་མཐུས་རང་གི་ལུས་བརྗེས་<sup>6)</sup>ཏེ་སྤུའི་ལུས་སུ་གྱུར་བའོ<sup>7)</sup>། །དེ་ལྟར་རང་གི་ལུས་སྤུའི་གཟུགས་སུ་བསྐྱར་ནས་དེའི་སྤྱིང་པོ་ཨ་ཅིག<sup>8)</sup>་བསམས་ཏེ། ཨ་དེ་ལས་བྱང་ཚུབ་ཀྱི་སེམས་ཀྱི་ཕྱག་རྒྱ་<sup>9)</sup>ཟླ་བའི་དཀྱིལ་འཁོར་མེ་ལོང་དང་<sup>10)</sup>འདུ་བར་བསམས་ཏེ་དེ་ཡང་ཤིན་ཏུ་གསལ་བ་དྲི་མ་མེད་པར་བསམ་མོ<sup>11)</sup>། །དེའི་དབྱས་སུ་ཡི་གེ་ཨ་ལས་བཅོམ་ཐུན་འདས་རྣམ་པར་སྤང་མཛད་ཀྱི་སྐར་གྲུར་པར་བསམས་<sup>12)</sup>ཏེ། དེ་བས་ན། གཞི<sup>13)</sup>་གཉིས་<sup>14)</sup>པ་ནི་<sup>14)</sup>ཡང་དག་པར་རྫོགས་པའི་སངས་རྒྱས་<sup>15)</sup>མེ་ལོང་གི་དཀྱིལ་འཁོར་<sup>16)</sup>དེ་ཉིད་ཀྱི་ནང་ལ་བསྐྱེད་ཀྱིས་པོ་ཆེན་པོ་ལ་བཞུགས་པ་སྟེ་བྱའི་ཉིང་དེ་འཛིན་ལ་སྟོམས་པར་ཞུགས་པ་ཞེས་པ་ལ་སོགས་པ་གསུངས་པ་ཡིན་ཏེ།<sup>16)</sup> (D. 14a1-4, P. 119b2-5, Bh D. 165b3-6, P. 207a5-b2) <sup>1)</sup>P. རྐྱར.  
<sup>2)</sup>Bh D, P. དག. <sup>3)</sup>Bh D, P. om. <sup>4)</sup>D. adds ལུས. <sup>5)</sup>Bh D, P. om. <sup>6)</sup>Bh P, རྗེས. <sup>7)</sup>Bh D, P. བ་སྟེ. <sup>8)</sup>P. ཞིག. Bh D, P. གཅིག. <sup>9)</sup>Bh D, P. add བསྐྱེད་པ. <sup>10)</sup>P, Bh D, P, om. <sup>11)</sup>Bh D, P. om. <sup>12)</sup>P. བསམ. <sup>13)</sup>Bh D, P. དེ་གསུངས་པ. (pada を語句と取っていったようである) <sup>14)</sup>Bh D, P. པོ. <sup>15)</sup>Bh D, P. add ཏེ. <sup>16)</sup>Bh D, P. ཀྱི་དབྱས་སུ་བསྐྱེད་ཀྱིས་པོ་ཆེན་པོའི་སྤྱིང་ན། ཕྱག་གི་ནང་ན་ཉིང་དེ་འཛིན་དུ་ཞུགས་ཤིང་། བཞུགས་པ་བཞིན་ཞེས་པ་ལ་སོགས་པ་སྟེ།.